

令和2年度自己評価シート(年度末評価まとめ)

校番	202 127	学校名	広島観智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	<input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 分
----	------------	-----	----------------	------	-------	---	---------------------------------------

1 評価結果の分析

(1) 成果

- 生徒のルーブリックにおける自己評価は、前回と比較し大きく上昇し、75%の生徒が学習やSAと本校のミッション等の関係性を表現することができた。保護者に対しては、本校の教育活動に対する理解を深めることができるよう、コーディネーターニュースやビデオ配信など、タイムリーに取組を行うことができた。
- 英語力の伸長に関しては、下半期は、外部検定試験や校内での取組をもとにクラス替えや個別の支援を行うなど、個に応じた適切な指導を行った。その結果、年度当初から1段階以上フェーズが上がった生徒の割合が75.6%であり、目標値を達成することができた。
- ユニットリーダーや生徒会委員長を中心に、より良い学校づくり、寮生活の実現に向けて自治的な活動を進め、個に対する丁寧な声かけと必要に応じた面談等を継続して進めることができた。また、居室の整理整頓や洗濯等、個別の支援を充実させるとともに、生活実態を家庭と情報共有する取組を進めることができた。寮生活に関するアンケート調査項目「あなたは、生活の決まりを守り、規律ある生活を送っていますか」において肯定的な回答が94.9%と高い数値になった。
- 県教育委員会が実施した「令和2年度県立学校における働き方改革・業務改善に係るアンケート」では、91.2%の教員が、「子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている」と回答しており、目標を上回るものであった。

(2) 課題

- 「学校のアイデンティティを明確にし、生徒・保護者・教職員が自らの表現で、自身の行動・活動の目的を説明することができる。」という達成目標の達成状況について、年間の取組に対するルーブリックを用いた自己評価(4段階)を実施し、数値としては目標を達成しているものの、4段階目の「学校のアイデンティティをミッション等と関連を明確にし、自らの表現で、自身の行った行動の目的や、これから行う行動・活動の目的を説明することができる」割合は十分ではない。
- 英語力の伸長に関しては、年度当初から1段階以上フェーズが上がった生徒の割合が75.6%であり、目標値を達成することができた。一方で、少数ながら苦手意識を持つ生徒もおり、達成状況に徐々に差ができていく。
- 寮生活に関するアンケート調査項目「あなたは、生活の決まりを守り、規律ある生活を送っていますか」において、肯定的な回答のうち「できている」と回答した生徒は、35.9%であり、「どちらかというときできていない」と回答した生徒は、59.0%であったことから、十分な取組とはなっていない。さらに、「どちらかというときできていない」「できていない」と回答した生徒もいた。
- 県教育委員会の「令和2年度県立学校における働き方改革・業務改善に係るアンケート」では、9割以上の教員が「子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている」と回答し、目標を達成している一方で、「子供と向き合う時間」において、生徒の成果物等を評価する業務が多くを占めており、生徒と顔を合わせて質問に応じるなどの時間が十分確保できていないことが分かった。

2 今後の改善方策

- 教職員に対しては、年間で行う研修などの取組とルーブリックの関係性をより明確化し、それぞれの教職員が、目標設定において、ルーブリックを活用し、本校のアイデンティティを表現することや、指導と学習の改善に役立てることができるよう取組を進める。また、今後も、コーディネーターニュース等により、高校から入学する予定の留学生確保に向けた取組の状況や、DPに関する情報を発信するなど、保護者が子供との関わりの中で、次年度以降への意識を高める働きかけができるよう継続的に情報発信を行う必要がある。
- 英語力の伸長に関しては、生徒の力に基づいた適切な外国語科のクラス編成を行い、個に応じた目標設定及び指導を充実させるとともに、その他の教科においても体系的な英語力の伸長に関わる指導ができるよう、カリキュラムのさらなる充実を図る。
- ハウスマスターやハウスサポーターと教職員との連携や指導方針の共有を図り、集団への働きかけと同時に、個への丁寧な支援等が一層必要である。そのため寮則の目的を一人一人の生徒が理解し、実践できる力を育成していくことを今後も継続していく必要がある。主な取組として、①生徒の心に寄り添うための厳しくも温かい指導の実践と個の生活実態に応じた支援の充実、寮則の見直しなど、生徒との信頼関係づくりを基盤とした寮運営、②保護者との積極的な情報共有を推進していく。
- 「子供と向き合う時間」の確保ができるよう、引き続き会議や行事の精選を進めるとともに、学級担任が生徒と計画的に面談を実施するなど、子供と向き合う時間の質的な充実に向け、各分掌や学年で効果的な事例を共有化し、実践する取組を継続する。

3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策

- 生徒一人一人の英語力の伸長に向けて、適切な外国語科のクラス編成を行い、個に応じた目標設定及び指導の充実を図るとともに、体系的な英語力の伸長に関わる指導ができるよう、研究を進める。
- 自分で自分の将来を選択していく力を付けさせることができるよう、「自分プレゼン」の学習活動について充実を図る。
- 高校段階からの留学生の受入れによる生徒の多様化・国際化に対応できるよう、学校生活や寮生活において検討すべき事項を明らかにし、具体的な取組を推進していく。
- 働き方改革のさらなる進展のために、先進的な取組や好事例について研修を深める。

